

シンポジウム

海外における中国都市史研究の現状

ここに掲載するのは、2005年7月30日、「海外における中国都市史研究の現状」を共通のテーマとして、比較都市文化史研究会（COE大阪プロジェクト・重点研究共催研究会）の主催で開かれた研究集会の報告をもとにまとめた論考である。

本COEは、今年度、これまでの研究成果をもとに「都市文化」とは何かという問題を理論的に集約する段階に入っている。この課題の解決に寄与する一つの試みとして、比較都市文化史研究会は、銭杭氏と王莉平氏をお招きし、海外における中国都市史研究の状況を紹介していただいた。

銭杭（Hang Qian）は、1978年、華東師範大学歴史系に入学し、大学院では呉沢教授のもとで古代史を専攻し、1988年に歴史学博士の学位（華東師範大学）を取得した。主要な著作としては、『周代宗法制度史研究』（学林出版社、1991年）、『中国宗族制度新探』（中華書局、香港、1994年）、『伝統と転型：江西泰和農村宗族形態』（上海社会科学院出版社、1995年）、『在血縁と地縁の間：中国歴史上的聯宗と聯宗組織』（上海社会科学院、2001年）などがある。また、現在は上海社会科学院研究員であるが、華東師範大学歴史系教授を兼任するとともに、中国社会史学会など全国学会の各種委員を務めておられる。上記の著作からも知られるように、銭杭氏は社会史のジャンルにおいて、宗族や農村調査などの研究に従事して、大きな成果を上げてこられた。研究集会では、『上海都市社会生活史』を叙述するうえでの三つの問題」と題して報告されたが、この報告では、従来の社会史研究が農村に注目してきたのに対して、都市社会史という新たな分野の確立が必要であることを主張された。

他方、汪利平（Liping Wang）氏は1980年、南京大学歴史系に入学し、卒業後、1987年にかけて、同歴史系の茅家琦教授のもとで中国近代史を専攻し、また、1987年から1990年の間、江蘇省社会科学院で助手を務めた。その後、カリフォルニア大学サンディエゴ校に留学して、中国近代史の博士号を取得し、1991年からミネソタ大学で教育研究活動に従事されている（現在は同大学助教授）。これまでの研究としては、清代から民国期にかけての、長江下流デルタ地域の都市（杭州、南京、上海）を取り上げて、都市の空間構造や文化、ジェンダーなどの諸問題に考察を加えている。なかでも、“Tourism and Spatial Changes in Hangzhou, 1900-1927”（Joseph Esherick ed., *Remaking the Chinese City: Modernity and National Identity, 1900-1950*, University of Hawaii press, 2000）は、近代を迎えた杭州における都市空間と文化の変容をダイナミックに描いた大作である。研究集会で報告された「アメリカにおける中国都市文化研究の現状」（英語による報告）は、アメリカにおける都市史研究の成果と問題点を、近代（民国期）と前近代（明清両王朝）の時代に分けて紹介し、都市文化に関する最新の研究情報を提供された。

本研究集会においてコメンテーターを務めた大黒俊二氏は、本誌掲載の「4つの視点からの中国都市史」において、銭杭、汪利平両氏の報告を比較しつつ、それぞれの特徴と問題点を指摘されている。氏が両氏の報告を通じて読み取った近代化論から社会史へという研究視角の変化は、中国やアメリカだけでなく、日本における中国史研究にも通底するものである。社会史というジャンルのなかで中国都市史は新たな方向性を見出しうるのか、この問題は日本、中国、アメリカを含む英語圏の研究者がともに今後の課題として共同で検討していかねばならない問題である。また本COEプログラムが掲げる「都市文化」は、大阪を中心として広くアジア地域を視野に収めているが、今後、アジア各地域を対象とした研究の成果を集約しながら、独自の理論を構築していくことが望まれるであろう。

（編集委員会）

日 時：2005年7月30日（土） 13:00～17:00

会 場：大阪市立大学第4会議室（経済学部棟2階）

研究報告（ただし、以下のタイトルおよび表記はシンポジウム開催時のもの）：

1. 銭杭（上海社会科学院研究員）＊通訳：王 標（COE特別研究員）
『上海都市社会生活史』を叙述するうえでの三つの問題
2. 汪利平（ミネソタ大学助教授）＊通訳：高畑 幸（COE研究員）
「アメリカにおける中国都市文化研究の現状」

コメント：

大黒俊二（大阪市立大学大学院文学研究科教授、COE事業推進協力者）
「ヨーロッパの都市研究の立場から」